

評論 2007年の北海道経済

12月●コンサドーレ、J1復帰へ

山田玲良

3度目の昇格

2007年12月3日、Jリーグ(社団法人日本プロサッカーリーグ)の臨時理事会において、コンサドーレ札幌(以下コンサドーレと略称。)のJ1昇格が正式に承認された。2003年シーズンにJ2へ陥落して以来、6年ぶりのJ1復帰となる。

コンサドーレにとって、Jリーグのトップカテゴリでの試合は、2部制が始まる1999年以前を含めても、1998年シーズン、2001年-2002年シーズンに続き3期目、通算4シーズン目ということになる。J2を戦った最近5シーズンは、主力選手を放出し、めまぐるしく戦力を入れ替えた。このため、「復帰」というより、全くの新生チームとしてJ1の舞台に挑む印象が強い。

財政問題

コンサドーレが2003年シーズンの降格からなかなか再昇格を果たせなかつたのは、財政問題が足かせとなって、外部からの補強によるチーム編成が難しくなっていたからである。コンサドーレは1996年の誕生以来、昇格を急いで、さらには目先の残留を焦るあまり、無理な選手補強を重ねてきた。その結果、コンサドーレを運営するHFC(株式会社北海道フットボールクラブ)の累積損失は2002年度までに実に28億円あまりに達していた。ところが、降格した2003年シーズンも、1シーズンでのJ1復

帰にこだわり、大型補強を敢行してさらに損失を膨らませてしまう。2003年度の累積損失は30億円を突破し、資本金に対する債務超過も4億5500万円に上るなど、HFCは深刻な経営危機に直面したのである。

HFCの財政基盤には大きな柱が欠けている。サポーター(サポーターズ持ち株会)が企業・団体や自治体を抑えて最大の出資者となっているが、裏を返せば、これは軸となる企業・団体スポンサーの不在を意味する(表1)。

このような資本構成は、「市民、企業、行政の三位一体のチーム」というJリーグの理念に沿

表1 HFCの主な株主と出資比率(%)

株主名	比率
サポーターズ持ち株会	21.56
石屋製菓	15.67
丸井今井	10.00
北海道	5.87
札幌市	5.87
サッポロビール	3.13
大成建設	1.96
北海道新聞社	1.17
北洋銀行	1.17
その他(224団体)	33.60
合計	100.00

(注) HFCの資本金は25億5600万円。2000年にサポーターズ持ち株会が出資額を3億円増やして5億5045万円とし、筆頭株主となった。

(出所) 僧都儀尚「コンサドーレ札幌、この10年の軌跡」『開発こうほうマルシェノルド』2006年9月号。

評論 2007 年の北海道経済

うものであるし、スポンサー撤退のリスクを分散する効果もあるため、一概に好ましくないとは言い切れない。しかし、2003 年シーズンの J2 陥落は、市民、企業からの寄付金の著しい減少を招いた。地元政財界が設立したコンサドーレ札幌北海道後援会を通じた寄付金は、ピーク時の 1999 年には 8000 万円に上り、2002 年でも 2500 万円あったが、2005 年には 600 万円にまで縮小している。その他の寄付金も、2002 年には 7200 万円を超えていたものが、2004 年には 500 万円余りまで激減してしまった。そして、その後も寄付金収入がなかなか回復しなかったのは、この時期、道内の景況が芳しくなかったことを割り引いても、チーム運営に責任をもつ大口スポンサーがないことが大きく響いたものとみられる。

育成によるチーム強化

2003 年シーズンの J1 復帰失敗と財政危機の深刻化は、外部からの補強による即席強化の道が絶たれることを意味した。同年、HFC は「コンサドーレ札幌強化計画」(以下「強化計画」と略称。)を発表し、元々定評のあった下位年代の選手育成を基盤とするチーム強化に乗り出した。その後のチーム成績は、高年棒のベテラン選手や外国籍選手を放出して臨んだ 2004 年シーズンこそ J2 の最下位に沈んだものの、そこから 2 シーズン 6 位を続けるなど、着実に階段を上った。そして、2007 年シーズン、ついに J2 優勝を果たし、J1 復帰を決めたのである。

ただし、外部からの選手補強の抑制により、財政問題は改善されてきているものの、解消への道のりはまだ遠い。2006 年度の累積損失は 27 億 5400 万円、債務超過は 2 億円弱と、依然深刻である。この水準は、前回 J1 を戦った 2001 年 - 2002 年シーズンの水準と大差ない。このため、2007 年シーズンは選手の年俸を一律 25% 削減せざるを得なかった。J1 を戦うとなれば、

チームの要所に力のある選手を配置することが必須であり、育成選手を主体とするにも限界がある。J1 残留を至上命題とすれば外部からの補強に頼らざるを得ず、人件費の大幅な増加は避けられないであろう。

順風を生かせるか

もちろん、J1 に昇格すれば広告や興行の収入も増えるため、人件費との収支をバランスさせることは可能である。実際、コンサドーレは 2008 年シーズンに向けて、株式会社ニトリから メーンスポンサーとしての広告費を 2 億円、選手の強化費用への寄付を 1 億円受け取ることになった。しかし、2009 年シーズンの残留を絶対的な目標に据えれば、增收を上回る補強を行わざるを得なくなるかも知れない。この場合、過去の昇格・残留争いのときと同様、累積損失を膨らますだけの徒労に終わる危険性がある。

コンサドーレは依然強化の途上にある。2007 年シーズンの J2 優勝は歯車がうまくかみ合った結果に過ぎない。シーズン前に目立った補強をせず、戦前は、前年・前々年シーズンと同程度の順位が予想されていた。したがって、舞台が J1 に移っても、まずは「強化計画」を最後まで遂行することに全力を注ぐべきであろう。

この場合、目先の勝利にこだわらないことにより、三度降格に甘んじる恐れはある。しかし、幸い、コンサドーレには既にコアのファン層が形成されている。2003 年シーズンの J2 降格後も、最下位に沈んだ 2004 年シーズン以外は 1 試合平均入場者数が 1 万人を超えており、運営費の節約に貢献するボランティア・スタッフの活動も活発である。万が一の場合も支えてくれるファンがいることを考えれば、財政悪化と J2 降格のどちらのリスクをとるべきか、答えは自ずと見えてくるのではないだろうか。

評論 2007年の北海道経済

〈参考文献〉

- ・僧都儀尚（2006）「コンサドーレ札幌、この10年の軌跡」『開発こうほうマルシェノルド』2006年9月号。

- ・コンサドーレ札幌ホームページ
<http://www.consadole-sapporo.jp/>
- ・『北海道新聞』各号
- ・『朝日新聞』各号